

出演者

コンサートマスター

三溝 健一

1st ヴァイオリン

伊野 晴香
上野 圭子
加藤 由香里
小菅 宏造
高松 理恵
橋本 士郎
横田 幸恵
岩田 貴守*
田中 陽子*

2nd ヴァイオリン

青木 由美子
安藤 優
五十嵐 健彦
齊藤 典子
山田 美幸
須田 政志*
八國生 紗也乃*

ヴィオラ

澤村 昂志
清水 哉子
中村 逸郎
古海 法雲
渡辺 みほ
高野 恵*
村井 宏明*

チェロ

池田 なつき
上野 敦子
佐藤 充
榎木 文子
水澤 由紀
瀬高 伸一郎*
山本 龍*

コントラバス

秋山 雅央
島田 望美
広瀬 吉成
吉崎 須賀子
渡辺 光
木口 聡*

フルート

小林 愛佳
齊藤 孝久
福田 幸久

オーボエ

兼古 祐輔
羽賀 純子
橋本 直子
皆川 正弘

クラリネット

齊藤 直美
鈴木 和久
富田 洋加
渡辺 英雄

ファゴット

荒川 裕紀
塩浦 絢子
宮口 弘明

トランペット

小林 美月
菅野 徳嗣
瀬川 靖久
水澤 学

ホルン

飯田 美由紀
笹川 修一
須田 孝義
森 真人
綿貫 英紀

トロンボーン

笠野 光雄
西山 瑤
松田 彰英

チューバ

吉越 篤*

パーカッション

稲田 善智
阿部 真代*
藤沢 紀章*
小池 凜*

ハーブ

山本 真紀子*

団長

古海 法雲

事務局長

茨木 真

*賛助出演・団友

楽団について

1972年（昭和47年）に結成されました。当時の日本の高度経済成長に呼応するように、アマチュア音楽家の活動が全国的に活性化する流れのなか、上越においても市民オーケストラ結成の機運が高まり、地域の高校管弦楽団OBら有志が集って演奏会を開催。以来、年2回開催している定期演奏会や各方面からの依頼演奏会を通して皆様に親しまれてまいりました。現在は指揮者に長谷川正規氏、コンサートマスターに三溝健一氏を迎えて充実した活動を展開しています。

当団では一緒に活動していただける団員を募集しております。募集パート等の詳細についてはWebサイトをご覧ください。素敵で愉快的仲間達と素晴らしい音楽を創りましょう。団員一同、心より歓迎いたします。

Web <https://www.joetsuso.info/>

TEL 090-1606-1254（事務局 茨木）



演奏会のご案内

第87回 定期演奏会

日時／2023年9月17日（日）14:00開演

会場／上越文化会館 大ホール

入場料／1,000円（高校生以下無料）

プログラム／

- ベートーヴェン : 「プロメテウスの創造物」序曲
- ブラームス : ハイドンの主題による変奏曲
- チャイコフスキー : 交響曲第6番 口短調 作品74「悲愴」

主催／上越交響楽団

JSO

Joetsu Symphony Orchestra

上越交響楽団 第86回 定期演奏会

MOZART
The Magic Flute - overture

DELIBES
Sylvia - Orchestral suite

SIBELIUS

Symphony No. 2

2023

3/26

SUN

13:00 開場 14:00 開演

上越文化会館 大ホール

指揮 長谷川 正規
コンサートマスター 三溝 健一

モーツァルト 歌劇「魔笛」序曲
ドリーブ バレエ組曲「シルヴィア」
シベリウス 交響曲第2番 ニ長調 作品43



※未就学児をお連れのお客様は、他のお客様のご迷惑にならないよう、ご配慮をお願いします。

主催／上越交響楽団
後援／上越市教育委員会、妙高市教育委員会



ご来場の皆様にご協力をお願い致します。

ごあいさつ

本日は上越交響楽団の演奏会にお越しくださり、まことにありがとうございます。

この数年間は新型コロナウイルス対策のため練習や演奏会に気をつかいましたが、現在もっと気になるのが、ロシアによるウクライナ侵攻です。ロシアの作曲家ムソルグスキーの名曲「展覧会の絵」の雄大な終曲「キエフ（キーウ）の大きな門」で知られている首都キーウが被害を受けている場面を見て、深い悲しみを覚えました。

ロシアには、他にもチャイコフスキーをはじめ有名な作曲家が多くいますし、優秀な演奏者もたくさんいます。また、オリンピックに出るようなアスリートも多く輩出していますが、みんな巻き添

上越交響楽団 団長 古海 法雲

えをくって国際的に非難されていることは残念でなりません。

私達が今日のように演奏会を楽しめる事は、平和であることありがとうございます。争いの苦しさの中でも、歌が出てオーケストラも加わり音楽によって人々の心が救われる、そんな場面を取り上げたニュース映像がありましたね。みんなが肩を組んで一緒に歌えたら素晴らしいなと思います。

本日のメイン曲として演奏する大作曲家シベリウスの国フィンランドも、過去には同じような境遇にありました。同国の自然豊かなラップランド地方で無数の水鳥たちが遊ぶ、そんな争いとは無縁の世界を思い浮かべ、純粋に音楽を楽しんでいただけたらと思います。



長谷川 正規

Masanori Hasegawa

指揮

東京藝術大学音楽学部器楽科（チューバ専攻）を卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。学部在学中に安宅賞を受賞。ソリストとして、松尾葉子指揮藝大フィルハーモニア、故岩城宏之指揮オーケストラアンサンブル・金沢、張浩指揮台湾・実践大学吹奏楽団等と共演。指揮の活動としては、上越交響楽団、上越市民吹奏楽団、新潟市北区フィルハーモニー管弦楽団の定期公演をはじめ、音楽劇「くびき野のうた」、ミュージカル「春のホタル」、オペラ「ヘンゼルとグレーテル」「愛の妙薬」「売られた花嫁」「デイドーとエネアス」等がある。これまでにチューバを稲川榮一氏に師事。現在、上越教育大学大学院学校教育研究科准教授。



三溝 健一

Ken-ichi Samizo

コンサートマスター

松本市出身。4歳よりヴァイオリンを始め、片岡世界・正岡紘子・山岡耕作・天満敦子の各氏に師事、東京音楽大学にて井上將興氏にヴァイオリン及び室内楽を師事。また、肥沼きよ・丸山嘉夫・竹内邦光・松本紀久雄・汐澤安彦の各氏にピアノ・ソルフェージュ・音楽学・指揮法を師事。大学在学中より多分野にて演奏活動を開始。編曲も多数手掛けている。また、これまで各地の学生・市民オーケストラにて演奏指導と活動の発展に尽力、後進の育成にもあたる。近年、汐澤安彦指揮「日独友好演奏会（ベルリンフィルハーモニーホール）」「Sio フィルハーモニックオーケストラ・ドリームコンサート（東京芸術劇場）」にてコンサートマスターを務める。足立シティオーケストラ・上越交響楽団・柏崎フィルハーモニー管弦楽団／コンサートマスター（常任・客演）・トレーナー・副指揮者（足立）。音泉室内合奏団／音楽監督（ソロ コンサートマスター）。池袋音楽学院・Gruppo Violini／講師。Musica Rospo／主幹。

プログラム & 楽曲解説

モーツァルト／歌劇「魔笛」序曲

モーツァルトが35歳で最後の年となる1791年にウィーンで作曲されました。初演から絶大な人気を博して、上演は20回を越えたと言われます。物語は古代エジプトの架空の世界が舞台です。魔法の笛に導かれた王子タミーノが、数々の試練を乗り越えて夜の女王の娘パミーナと結ばれるというロマンスと、夜を支配する夜の女王が昼の世界を支配する高僧ザラストロに倒されるという話のパラレルワールドです。ここでモーツァルトは、主役よりも成敗される側の夜の女王や、試練から逃げ出す

鳥刺しババゲーノなどの脇役に魅力的な音楽を与えています。ババゲーノのアリア「おいらは鳥刺しババゲーノ」や、夜の女王が雷鳴と共に登場する超絶技巧のアリアなどは最高の聴きどころです。

序曲は始めに三つの和音が鳴り響き、厳かな夜の雰囲気、冒頭部、ババゲーノの軽快な立ち回りや夜の女王のアリアを連想させるテーマが続き、これから始まる歌劇を見事に象徴して観客を物語に引き込む名曲です。

ドリーブ／バレエ組曲「シルヴィア」

コッペリアと並ぶドリーブの代表的なバレエ作品で1876年にパリのオペラ座で初演されました。物語はギリシャ神話が基になっています。女神の森で、羊飼いの青年アマンタが美しい妖精のシルヴィアに恋をしてしまいます。しかし、森においては妖精と人間の恋愛はタブーです。そんな二人を愛の神エロスが近づけようとはしますが、悪しき狩人オリオンがシルヴィアを奪い自分の洞窟に連れ帰ります。捕らわれたシルヴィアは、オリオンを酒で酔いつぶした際に洞窟から逃げ出します。そして、愛の神エロスのとりなしによって、女神から許しを得たシルヴィアとアマンタは、めでたく結ばれるというお話です。バレエ音楽は明るく楽しいものばかりで、ファンタジックな物語を表しています。

1 前奏曲「狩の女神」
明るいファンファーレの後に狩の角笛が聞こえます。舞台は女神の森、

シルヴィアと狩の女神たちが踊る様子を見ていたアマンタが、シルヴィアを見染めます。

2 間奏曲とゆるやかなワルツ
狩の女神たちが疲れを癒す場面です。優雅で洗練されたワルツのことで、水浴したり木陰で戯れたりする姿を表します。

3 ビッツィカート
弦楽器のビッツィカートと中間部の木管楽器によって、さらわれたシルヴィアの身を案じているアマンタの心持ちを表します。

4 バッカスの行列
村人たちが酒の神バッカスを賛美する場面です。勇ましい金管のファンファーレにより、弦楽器を従えて堂々と入場してくるような行進曲です。優雅に歌うような中間部を経て、バッカスを称えるように盛り上がります。

〈 休憩 〉

シベリウス／交響曲第2番 二長調 作品 43

シベリウスが交響曲第2番を完成したのは1902年です。交響曲第1番や「トゥオネラの白鳥」の創作がフィンランドで好評を博し、ヨーロッパ各地への演奏旅行が成功して、国際的に知名度を高めた時期でした。当時のフィンランドは、折しも帝政ロシアの支配下で圧迫が強まった時期でもあり、反発する国民の独立運動への機運が高まっていました。そうした社会的背景の中で初演された交響曲に対して聴衆は母国への熱情を感じ取り、独立への感情を高揚させました。そのため当時の支配権力から演奏禁止処分を受けたほどです。

シベリウス自身は政治的な意図を否定していたとの説もありますが、曲そのものはウィーンやベルリンへの留学で学んだヨーロッパ伝統の作曲技法を模範としながら、北欧の地に独自の音楽を築こうと言う意気込みにあふれています。

第1楽章
弦楽器の語りかけるような動機の後に、木管楽器による民謡風の第1主題と力強い第2主題が続きます。全体に牧歌的な安らぎに満ちた

楽章で、途中かげりや激しさが表れつつも、終段には穏やかになります。**第2楽章**

死を予感させる低弦楽器のビッツィカートに続き、ファゴットが哀愁に満ちた主題を歌います。憂いと不安の色に包まれた幻想曲風の楽章で、時折あらわれる教会法が神による救いを連想させます。

第3楽章
スケルツォ的な楽章で弦楽器の速く荒々しい動機で始まります。トリオではオーボエが牧歌的な旋律を歌い、再び荒々しさが戻った後に第4楽章の動機を暗示しながら高揚して、その頂点で切れ目なく終楽章になだれこみます。

第4楽章
壮大なフィナーレで勝利の凱旋を連想させます。弦楽器による力強い第1主題とそれに応える輝かしいトランペット。第2主題は木管楽器による哀愁を帯びた旋律。この主題は楽章後半に向けて息の長い展開をみせます。最後は堂々たる頂点を築き全曲を締めくくります。